

河内屋
茂兵衛様

三三 〔天保六年〕二月二日

尚、もし当春も茂兵衛様長崎へ御出被成 御留守
中ニ候ハ、御見せの衆中御断り置被成候て 御帰
宅之節 無御失念御披露被成候様 奉願候

一筆致啓上候 寒暖不順之時候ニ候処 御揃弥御安全
被成御消光 珍重奉存候 然ハ二月四日之御状式通
同十二日自丁子屋被届之致拝見候 俠客傳四集校合見
遣し有之候ニ付 旧臘丁子屋幸便ニたのミ 書状差出
し候処 後ニ承り候へハ 其節丁子屋を幸便無之 校
合之義ニ付先拂ニて飛脚へ出し候よしニ御座候 然処
右書状早春ニは御地に着いたし候へとも 飛脚状配り
脚賃高料ニ申候間 御店之手代衆拙者方々之用書と御
見受ながら叱り返し 書状請取不申よし 尚又早春拙

三三 〔天保六年〕二月二日

者方々差登せ候書状ニて 右校合之事御承知被成候へ
とも 最初の書状不被受取候故 何分わかりかねよし
被仰越 致承知候 依之今般尚又右校合見おとしの分
別幣ニしるし 此度ハ丁子やに不頼 拙者方々脚賃江
戸拂といったし差出し候間 定而御請取被成御覽候半と
奉存候 俠客傳四集板不残着之節 別幣の通り無相違
御直させ 直しの処又キすりニ被成 御見せ被成候上
ニて御すり込せ可被成候 右俠客傳四集校合 去年九
月節句後よりかゝり 十二月中旬やうく校合いた
し終り候 尤序文ハほりおそなはり 十二月上旬やう
やく出来参り 板のほせ出船有之よしニて 丁子屋を
ことの外急キ被申候ニ付 序文ハほりもよろしく候か
甚せわしく校合いたし遣し候故 つひ見おとし有之
尤遺憾不少候 凡四ヶ月の間 校合ニいとまを費し候
苦心 御遠察可被成候

一京大坂の飛脚問屋 江戸をちん先拂ニいたし出し候へ
ハ 定式を賃銭倍し 伴頭の徳分ニいたし候よし か
ねて及聞候へとも 書状封ハ脚ちん六日限早便り百

一二五

廿四文ニ御座候 それヲ餘計ニとり候とも 百五拾文
歟式百文の上ハ出申事と存候 それを拙者方々之急
状と見受ケなから 不被受取候 御見せの衆の取斗ひ
よほときひしき御家風と寒心いたし候事ニ御座候 う
り出し御急キも不被成候御様子ニ付 此度ハ十日限ニ
いたし 脚ちん拙者方々出し申候 此段御承知可被成
候

一拙者事去夏大病後大ニよハく罷成り 且当正月六日七
日比々流行之風邪ニなやミ候処 三度も四度も引かへ
し今に月代いたしかね 長髪白髯の為体ニ罷在候 其上
右眼ハ去春已来一向ニ見え不申候 左りの方一眼のミ
に候へとも それも夜分ハかすミ ともし火のもとニ
て筆とり候事成かね候 疝積腰痛ハ常の様ニ成り 歩
行ハ一向出来かね候 ケ様之仕合ニ候間 合巻画草紙
細字の書ものハ難義ニ付 その向諸板元へ一同ニ断候
へとも 鶴屋泉市ハ三代之なしミにて 拙者作の合巻
年々新板無之候てハ 春の商ひの障リニ成候よしにて
度々口説れ潤筆ハ是迄の一倍ニ可致候なと被申候 あ

へて潤筆の多少ニ拘り候事ニも無之候へとも 久しく
なしミの事故 すけなくも断りかね候 先づ其意ニ任
せ置候 依之よみ本類も右之趣ニて 少々の事なから
八犬傳同様之潤筆ニ申受度よし 先得御意候処 俠
客傳ハいつもうり出しの時節あしく候故 御引合かね
被成候ニ付 是迄の通りの潤筆といたし候様被仰越 致
承知候 右之趣ニハ候へ共 潤筆之義ハいか様ニても
宜しく候 但し俠客傳四集五冊ハ 一昨年巳ノ冬十月
下旬稿本綴り終り 一二三板下出来の分ハ 丁子やが
板木師^シにわたし候処 正月二日うりの間ニ合かね候間
彫刻御延引のよしにて 右板木師へわたし候板下筆工
とり戻し候よしニ御座候 然ル処去春大江戸大火にて
板木師共類焼いたし 丁子やも同断ニ付 昨春はりニ
出し候俠客傳彫刻故障のミにて及延引候上 此度ハ大
坂に而職人ニ御すらせ被成候よしにて 板木不殘船つ
ミにて御とり被成候故 いやく遅滞いたし うり出
し時節あしく成候事ト存候 それを作者の咎のやうに
うり出し時節いつもあしき故 御引合不被成よし被仰

越 何とも迷惑いたし候 此段失礼なから得与御勘考
可被成候 何分いきほひを抜キ候てハ 三ヶ年ニ及候
ても出来かね 間ニ合不申候事自然の勢ひニ御座候

一前文之趣ニて 拙者事老衰の上眼氣あしく成候故 心
斗ハ急キ候へとも よみ本類著述屋のミ故 是迄の通
りニ速ニハ成かね候 右ニ付俠客傳五集も 中ノ急
の御間ニハ合かね可申候 もしあまり長引候ハ、先
達而被遣候五集潤筆内金ハ 先つ返却いたし度 此段
丁子屋へも致相談置候 随分つゝり候つもりニハ罷在
候へとも もし当年中ニも来年ニも出来かね候ハ、
きのとくニ存候故 萬々一左様之仕合ニも成候ハ、
金子返却可仕候間 此段かねて御承知可被下候 是等
之趣得御意度 先便之御答旁如此御座候 恐惶謹言

二月廿一日

瀧澤篁民

河内屋

茂兵衛様

尚々 御手代衆庄兵衛殿も御状被遣候得とも 右同
断之義ニ付 別段御返事不致候 宜く御傳声可被下候

三四 〔年未詳〕正月七日

三四 〔年未詳〕正月七日

尚々 乍輕少家製黒丸子一包致進上之候 右は新年
慶賀之寸贊迄ニ御座候 御祝納所希御座候 已上
新春之御慶不可尽期 重畳目出度申納候 先以御揃弥御
安全可被成御超歳 珍重奉存候 蔽屋無異致加年候 御
休意可被下候 為年始御祝詞可申演如此御座候 猶期永
日之時候 恐惶謹言

瀧澤篁民

一
正月七日

解〔花押〕

河内屋

茂兵衛様